平成３０年度宇部市総合教育会議（第２回）　議事録

１　日　時　平成３１年２月７日（木）１７：００～１８：３０
２　場　所　宇部市役所　４階　第２・３・４委員会室
３　出席委員の氏名
　久 保 田　后 子　市長
　野　口　　政　吾　教育長
　田 村　賢 二 郎　委員
　山 野　あ い 子　委員
　川　﨑　　裕　美　委員
　重　村　　美　帆　委員

４　事務局出席職員
　佐野教育部長、坂本参事、床本総務課長、
　村上施設課長、網本学校教育課長、三原学校教育課長同格、古富教育支援課長、
　田原教育支援課長同格、谷学校給食課長、水津コミュニティスクール推進課長、
　佐々木人権教育課長、池田学びの森くすのき・地域文化交流課長、藤永図書館長、
　山本副館長、小林総務課副課長
５　趣　旨
（事務局）床本総務課長
　ただ今から、平成３１年度宇部市総合教育会議（第２回）を開催いたします。
　本日の議題は、「読書のまちづくり」と「ＳＮＳを活用した相談体制の充実」の２件となっております。
　本日の会議の終了時刻は、１８時３０分を予定しています。
　それでは、ここからの進行は、本会議の主宰者であります久保田市長にお願いします。
（委員）久保田市長
　皆様、お忙しい中ご出席いただき、誠にありがとうございます。成人式にもご出席いただきありがとうございます。おかげさまで、和やかで、きちっとした成人式だったと思います。それでは今日は先ほど司会が紹介しましたテーマについて、ペーパーレス会議ということで、タブレットを使用した説明や議論ができたらと思いますのでよろしくお願いします。
―　読書のまちづくり　―
（委員）久保田市長
　それでは早速ですが、議題１「読書のまちづくり」ということで、事務局から説明をお願いします。
（事務局）藤永図書館長
　「読書のまちづくり」について、説明させていただきます。２年後の２０２１年に、宇部市制施行１００周年を迎えますが、平成３年３月に建設されました図書館も３０周年を迎えます。３０年前の建設当時と比較すると、施設や設備も老朽化するとともに市民の求めるニ

ーズも多様化し、図書館のあり方も随分変わってきております。このような市民の図書館へのニーズ、また読書活動の実態、国の動向なども踏まえて、今読書のまちづくりに取り組むことが、なぜ必要なのかということについて御説明します。読書のまちづくりの中心となる図書館に利用者が望むサービスですが、昨年行った利用者へのアンケートから見ますと、蔵書資料の充実、施設のリニューアル、くつろぎの場への要望が多いことがうかがえます。次に図書館の利用状況ですが、昨年行った市民アンケートから見ると、図書館は子どもから御年配の方まで幅広くご利用いただいている施設ですが、約６５％の市民の方が、ほとんど利用されていない、利用されている方の固定化等が課題であると考えています。子どもを除いた市民の読書活動の状況ですが、約半数の市民の方がほとんど本を読んでいないという結果となっています。これは宇部市だけでなく、全国的にも同様の結果となっています。また、生涯学習の現状と意欲という少し広い観点から、国が行った調査によりますと、読書を含めて約４０％の方が、１年間学習を行っていないと回答されています。しかし、一方では、約８０％の方が、学習の意欲があると回答されており、きっかけあるいは気運の醸成が必要であると考えています。次に、人口減少社会における社会教育のあり方について、中央教育審議会が昨年４月に発表した答申によりますと、グローバル化の進展、地域のつながりの希薄化、ＳＤＧｓに向けた取り組みなど住民がまちづくりに主体的に関わっていく持続可能な社会づくり、また、人生１００年時代、ＡＩの急速な進歩によるＳociety５．０超スマート社会に向け、誰もが生涯にわたって必要な学習を行う環境整備が要請されており、人と地域をつなぐネットワークや人材育成が必要であると報告されています。このような状況の中、今後の図書館のあり方についても、人生を豊かにする読書機会の提供、学校との連携の強化、地域課題の解決や、地域の主体的な取組への支援機能の充実を図る必要があります。そのために、情報拠点、交流拠点としての機能強化、また、知識・情報拠点としての資料の充実、関係機関、部署との連携のもと、社会的課題に対応できる運営体制の充実が必要であるとされています。このような市民や利用者のニーズ、また、多様化し、複雑化する社会の変化への対応等、今後の図書館のあり方を踏まえて、市制施行１００周年及び、図書館開館３０周年に向け、「ＵＢＥ読書のまちづくりビジョン」のイメージ図に示すとおり、図書館を核として、多様な主体が連携し全市的に読書のまちづくりを推進していきたいと考えています。読書のまちづくりを進めるにあたっては、様々な主体、ステークホルダーがさらに連携ができるネットワークづくり、読書のまちづくりを通じた人づくり、まちづくり、その拠点となる図書館の全面リニューアルの大きく４点を中心に進めていきたいと考えています。具体的には、まず読書による人づくりについてですが、子ども若者読書活動の推進につきましては、現在策定を進めています第三次子どもの読書活動推進計画に基づき、学校、地域、関係団体と連携し、読書行事等の充実を図りながら、積極的に進めていきたいと考えています。生涯現役に役立つ読書の普及啓発については、子ども、若者、高齢者までそれぞれの世代に応じた効果的な啓発を、戦略的に実施していくことが読書のまちづくりを進めるうえで、重要なポイントであると考えています。健康づくりの連携については、健康に関する情報を知っていただくことや、読書による健康づくりの効果も期待できることから、重点的に取り組む必要があると考えています。次に、読書活動を支えるボランティアの育成についてですが、読

み聞かせのボランティアや、広く読書のまちづくりを進めるためのコーディネーターを担える人材の確保が必要であると考えています。子どもの読書活動推進の取組の事例ですが、今年度から、宇部志立市民大学特別講座として、絵本の読み聞かせコースを開催しました。４０名近くの方に受講していただき、地域のボランティア等で活動していただいています。昨年の夏休みに厚南ふれあいセンターで、講師を招いて読書感想文の書き方講座を開催しました。次に健康づくりとの連携ということで、関係部署と連携し、健康情報の発信、意識啓発など健康に関する図書の紹介を交え、来館者に好評をいただきました。読書が健康寿命を延ばすということで、昨年ＮＨＫで放送された読書の健康への効果の事例になります。本を読むということは脳の活性化にも効果があって、認知症予防にも運動と同様に健康づくりにもつながるものと言われています。この番組の中で６５歳以上の方を対象にＡＩを使って分析したところ、本や雑誌を読むということが、健康寿命を延ばす大きな効果があるとされていました。また、山梨県は健康寿命が長いということで、その理由として、図書館の数が多く、公立小学校の学校司書配置率が９８．３％で、子どものうちから読書習慣が根付いている成果によるものと伝えていました。このような事例を紹介しながら、市内の方に対して、健康づくりのために読書を進めることも一つの手法であると考えています。次に、読書によるまちづくりですが、どこでも読書に親しめる環境づくりとして、図書館だけでなく、市民がいつでもどこでも気軽に読書に親しめる環境づくりを進めるため、今年度から、まちかどブックコーナー事業を創設しました。現在、市内の飲食店など７か所に設置しており、今後、市内全域に広げていきたいと考えています。そのほか、本を通じたコミュニティづくり、アート、文化他様々な施策に参画していただけるような取り組みを進めながら、読書によるまちづくり、読書を通じて市民が主体的にまちづくりに参画できるような取組を、積極的に進めていきたいと考えています。これは、本を通じたコミュニティづくりの例ですが、全国的にも広がりつつある、本を通じたコミュニケーションづくりなどにつながるビブリオバトルを行いました。図書館だけでなく、学校地域など様々な単位で開催できるイベントですので、普及啓発に努めていきたいと考えています。次に、読書のまちづくりの核となる図書館の全面リニューアルについてですが、市民ニーズや、先ほどの国の中央審議会の答申にもありますように、図書館のあり方についても変革を求められているところであり、知の拠点、集いの場、憩いの空間というコンセプトのもと、これからの超スマート社会に対応したハイブリット図書館、交流憩いの場としての図書館情報発信情報交流の場としての図書館、また、宇部の歴史文化を伝承し、長く愛される図書館として、市民の御意見をお伺いしながら、全面リニューアルについて検討していきたいと考えています。ハイブリット図書館の事例ですが、昨年導入しました自動貸し出し機返却機、県内初となる予約取り置き棚を導入しました。利用者サービスの向上、業務の効率化につなげるため、今後もＡＩの活用や電子書籍の導入についても検討していきたいと考えています。次に、集いの場、情報発信の場としての取り組み事例についてですが、昨年、クリエーター有志の会とのコラボレーションによるマルシェ、ワークショップなどによる賑わい創出イベントを行いました。来館者や出展者からも大変ご好評をいただき、くつろぎの場としての図書館の魅力発信、また新たな利用者の獲得にもつながる効果があったのではないかと考えています。次に、地球温暖化防止月間に環境部署と

の連携によるイベントを行いました。賑わい創出と情報発信の相乗効果もあり、今後も環境健康文化などの取組を拡大していきたいと考えています。最後に、読書のまちづくりに向けての今後の取組についてですが、読書を通じた人づくり、まちづくりを進めていくためには、図書館、学校、地域、企業など多様な主体が連携して、読書のまちづくりを進めるネットワークづくりが必要です。来年度ではワークショップなどを通じて広く議論をしながら、図書館全面リニューアルの検討を含めたＵＢＥ読書のまちづくりビジョンの具体化、また、多様な主体が連携しながら、全市的に読書のまちづくりを推進する体制を構築していきたいと考えています。その中で、フォーラムの開催や効果的な情報発信啓発活動などを展開しながら、読書のまちづくりに向けて、気運の醸成に努めていきたいと考えています。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。

早速ですが、ただ今の説明について、御意見や御提案をお願いします。

（委員）山野委員

読書のまちづくりをするにあたっては、その中心となる図書館が、市民と行政が話し合いを積み重ねながら、誰もが気軽に利用できる広場のようになればいいと思います。読書に興味がある人だけではなく、読書に興味がない人や中高生、若い母親など多様な市民の声を聞きながらつくっていくことが、みんなが読書に関心を持つことにつながるのではないかと考えています。その一つとして、遠くの小学生が自分で来館できるように、バスなどの公共交通機関を利用できたり、館内でいえば各書架の表示を大きくしたり、書架のそばに机や椅子があれば利用しやすいのではないかと思います。それから、提案の中の憩いの場という点ですが、今の状況では、お母さんが小さいお子さんを連れて来館した際、お子さんが騒いでしまうと出ていかざるを得ない状況になるので、キッズスペースがあればいいと思います。大人とキッズの間に仕切りをして、さらにキッズスペースから直接外に出られるようにできれば、お母さんが小さな子ども連れてきても安心して過ごせますし、子どもも図書館は楽しいところだと感じてくれるのではないかと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。具体的に新しいイメージと今の課題を言っていただきました。まず、公共交通機関については、今のルートで図書館の近いところに停まる循環バスがあります。ただ、本数が充分であるかということ、また敷地内まで乗り入れてはいないこと、また循環バスでは遠くから来てもらうことにはなりませんので、その意味では課題だと思います。それから、子どもが安心して利用できるということでは、今、畳の部屋と読み聞かせの部屋がありますが、読み聞かせなどで使用する際に仕切りをする以外は全部開けていますから、多少はリラックスできても、大きな声を出すという雰囲気にはならないというのはあるかと思います。

（委員）田村委員

図書館は、読書のまちづくりの中心となる存在であり、そのまちの文化度や、教育に力を入れている度合いが分かる施設だと思います。宇部市は人口規模に比較して、図書館自体が狭い印象があります。大きくするのは難しいと思いますが、狭い中で改良していく方法を考

えなければならないと思います。図書館にカフェが欲しいという意見が以前から出ていますが、確かに、カフェが図書館に併設されていると、魅力が一気にアップすると思います。具体的な場所としては、図書館の北側にある芝生の広場の奥が、日陰になっていて殆ど活用されていないと思いますので、３分の１か半分程度をカフェにすれば図書館に興味のない人たちが来館するきっかけにもなり、読書人口の増加につながっていくのではないかと思っています。それから、２か所ある中庭を開放して椅子やテーブルを置いて読書ができるようにしたり、貴重な資料が多いので難しいかもしれませんが「参考調査・郷土資料室」の仕切りを取り払って、あのコーナーの資料を、市民が普通に手に取ることができるようにしたりできれば、活用できるスペースが広がりますし、資料も十分に活用できるのではないかと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。充分活用されていない場所について、御指摘をいただきました。

（委員）川﨑委員

読書のまちづくりというところでは、自分の生活に応じて利用しやすい場所で本に触れることができる、身近な場所に本があることが理想だと思っています。今まで、会議や研修会で、徳山駅前図書館を４回利用し、３階の交流室で研修会を行いました。また、周南方面に行くときはいつも電車を利用しますが、資料の確認もでき、時間の有効活用ができました。公共交通機関の便が良いところも、利用したくなるポイントの一つではないかと思っています。それから、自分が最近何を読んだか思い出してみると、研修会や講演会の講師の著書や、子どもの冬休みの宿題に関係する本など、生活に応じた子どもとともに楽しめる本を読んできたと思います。また、イベントを開催するときに、そのイベント内容と関連する本や、講師のおすすめ本も一緒に展示等できれば、本に興味が湧くきっかけになるかと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。イベントと組んで本を身近にしていく、公共交通機関の結節点の利便性と、高齢者や中学生や高校生、小学生も、いつも車で送り迎えされながら図書館に来るよりは、自分のあいている時間にバスに乗って行ける、安全に気をつけながら自転車で行ける図書館であることも、大事なポイントではないかと思います。

（重村委員）

今後、図書館を新しくしていくならば、親子連れの利用者が利用しやすい駐車スペースも考えていただきたいと思います。土日に利用したときは、駐車スペースがなくて苦労することが多いですし、雨の時も小さい子ども連れだと、本を抱えて車まで行くのが本当に大変です。次に、一般の方が静かに読書したり学習したりできる静の場と、小さな子どもさんが楽しく本に触れることができる動の場が、それぞれ図書館の中で確保されると良いと考えています。それから、今、教育現場が、アクティブ・ラーニングということで、主体的な学びとして対話ができる場を盛り込んだ授業展開をしていますので、図書館にも例えば小さな会議室のような、小中高生が本を使いながら討論や議論、対話ができるスペースがあれば良いと思いますし、学生が友達と楽しく話せる場所や、一緒に本を読みながら少し会話もできる環境があると、本を通したコミュニケーションも出てくるのではないかと思っています。

（委員）久保田市長

図書館は静寂の場で、心静かに本を読む、あるいは貸出を行う場ということが私たちの中に強くあるわけですが、もっと多様な人たちが利用できるようにするためにはどうしたら良いのかという観点からみると、多くの可能性があります。当初設計したときにも、同じ考えがあったために畳の部屋や個室、ホールも作ったのではないかと思います。ですが、今改めて言われるような活用が充分できていないということです。会話や話し合いができる、１冊の本を通したアクティブ・ラーニングができるスペースは今の図書館でも充分あると思います。今解放されていない場所も外に出られるようにするなど、すぐできることも今のみなさんの議論の中で見出すことができたと感じたところですが、教育長はどうお考えでしょうか。

（委員）野口教育長

総合教育会議に何回か参加しましたが、今までの議題を振り返ると、ＩＣＴや英語、不登校、子どもの安心・安全、インクルーシブなど、学校教育、特に教育行政に関することが多かったと思います。今日の議題は図書館という、教育行政の一つではありますが、まちづくりにつながってくるものですので、私を含めた教育委員が市長と図書を通したまちづくりについて語れる、いい議題だと思っています。その中で、今までの既成概念を超えた図書館を作っていきたいという夢を今は語っていく段階で、それを一つ一つ具現化していくために努力していかないといけないと思っています。それから、先日図書館に行ったときに、中高年の男性が多いと気付きました。男性は会社と家の往復、子どもは学校と家の往復、図書館はその中でサードプレイスとして、家と会社・学校との往復だけではなく、途中で図書館に寄ることができる、そんなイメージの図書館を目指していきたいと思っています。その中で、今、スポーツのまちづくりや文化のまちづくりなど、まちづくりに関していろいろなことに取り組んでおられる中で、今回は読書のまちづくりということで図書館が中核となるのはもちろんですが、このような、市政全体に広がるような議題はあまりありませんので、この機会に、このまちづくりに対する市長の思いをお聞かせいただければと思います。

（委員）久保田市長

教育長が言われたとおりで、図書館は中高年の男性が朝からたくさん利用されているということ、学習環境を整えたことで、入口のロビーのところまで、子どもたちが勉強に利用しています。ある意味塾でも学校でも家でもない、そんな居場所になっています。２階の会議室も解放しているので、子どもたちが使っています。その意味では、狭くて満杯というのは折に触れ見ています。図書館が３０周年を迎えるにあたって、新たな機能を広げていくというのは重要なことではないかと考えています。そういった意味で、まちづくり、あるいは宇部市の文化の拠点としても充実していく必要があるということはみなさんと一緒の思いです。ただ、図書館だけが充実すればいいわけではなく、身近なところでもっと本に親しめる環境ということで、去年の春から街角に図書コーナーを設置しています。これまでも、ふれあいセンターによってはかなり広い一室をとって読書室を設けているところもありましたが、本だけ置いて場所があれば親しめるかというとそうでもありません。やはりある程度の仲間がいることも必要なのか、公共施設の本のコーナーが充分活用されていないところもあります。そこで、一つのビジネスモデルにもなっているカフェと本ということで、宇部にあ

るカフェなどで希望されるところに読書のコーナーを設けて、そこの経営者が一緒に本の管理等を行っていくということを去年から始めています。まだ１年経っていませんので、結果を検証してみて、それほどお金をかけずに、市民の力も広げていくことができるのではないか、また、利用された本の活用にもつなげられるのではないかと思っています。読書のまちづくりは、拠点としての図書館を更に充実させていく、それから地域の身近なところで民間のみなさんの通常の活動としても、カフェなどはさらにやっていく必要があると思います。教育長に更にお聞きしたいのが、読書のまちづくりは本格的には充分できていませんが、子どもの読書活動は国の法律ができてからもう何年も実施していますが、宇部市の子どもの読書の状況は良くなっていません。ここはどうしたらいいのか。まちづくりでやるなら市長部局としても大きく責任があると思っていますが、子どもの学習における読書を推進しても、本の好きな子どもの割合が減っており、不読書層の割合が増えています。ほかに楽しいことがいっぱいあるということもあるのでしょうが、計画を進めてきても、目標を達成していないわけです。司書教諭を配置し、本も増やし、支援員も増員して、量的な充実は図りました。市長部局としては、行える支援は全部行ってきましたが、結果としては全然出ていないわけです。この原因をどう考えておられるか、まずはお願いしたいと思います。

（委員）野口教育長

子どもたちの読書活動は、まず学校図書館がありますが、教育活動全般において、例えば「朝の読書」を１００％に近い形で行っています。それから、いろいろな調べ学習や教科の学習、総合的な学習の時間、環境教育、国際理解教育などでも図書館を活用しながら、本に親しむ環境は作っているというのが現状だと思いますが、なかなかそれでも読書好きの子どもが増えず読書離れが進んでいるという結果になっており、これについてどう対応していくかは、今からの大きな課題として考えています。その中で、読書が大切だから読んでみましょうと言うことは簡単ですが、何のために本を読むのかという目的意識を、今から私たちは子どもたちに与えていかなければいけないと思っています。もう一つ、データとして出ているのが語彙力の差です。例えば、６年間で標準の子の語彙力が８，０００語、よく読む子が１２，０００語となっています。本を読んだことによって、自分の学びや生活、好きなことなどにこんなに役に立ったと例を示しながら取り組んでいきたいと思っています。ただ、今減少しているのは事実ですので、それ以外にも山野委員も経験上いろいろな方策を御存じだと思いますので、参考にしながらやっていきたいと思います。

（委員）久保田市長

山野委員、お願いします。

（委員）山野委員

読書が大好きな子は、今までにきっかけを作ってもらっていて、親や教師が何も言わなくても本が好きです。本を読まない、魅力を感じていない子が特に増えてきたと、先ほども言われていましたが、この子たちも課題など何かのきっかけがあると読むと思います。例えば、図書館に小中学生が自分で企画運営する展示コーナーなどあれば良いと思いますし、また、図書館だけでなくふれあいセンターの読書コーナーなどで、小学生と中学生、高校生が一緒になって企画運営できる機会と場所があれば、地域の人とのつながりもできるかもしれない

と思います。それから、宇部の文化や歴史、著名人の紹介コーナーがあってもいいかと思います。宇部の文化や歴史、宇部出身の著名人について、自分自身で調べて紹介コーナーを作っていけば興味を持って関係する本を読みだしたり、宇部の人に対する思いなども培われたりするのではないかと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。具体的に御経験を踏まえた御提案をいただきました。主体的に子どもたちが学び、それを披露する場を設けていくことで、自分たちで調べなければ、読まなければといったことにつながるのではないか、仕掛けを作っていくということですが、ただ学校現場では、長年に渡ってそういうことを実施してきたと思います。また地域でも実施しています。それは大事なことではありますが、それを実施しても伸びてきていないのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

（委員）野口教育長

いろいろな仕掛けをしていても、実際に日常的な読書活動につながっていないのが現状かと思います。今の子どもたちは、文章を書くのが非常に苦手です。それを好きにさせようとすると、多作化・日常化というのがあります。読書で言えば常に読むこと、すぐに読める環境があること、たくさん読める環境があることです。ただ、それを言うのは簡単ですが、子どもは目的意識がないと読みませんので、そこは今からの課題だと思います。一つこれだけは効果があると考えられるのが、宇部市全体で今から読書のまちづくりを行います。ということは、親や兄弟、祖父母など周囲の人々みんなが読書好きになれば、子どもも読書が好きになるという、波及効果は絶対にあると思います。だからこそ宇部市全体で読書のまちづくりを進めていくというのも、きっかけの一つにはなるのではないかと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。さっきのアンケートでもありましたが、大人が読んでいない、読書離れしているという、根本的に社会全体が本離れして、書店がまちから少なくなっています。その一方で、翌日には届くという流通の利便性は高まっており、社会の変化に伴って新しいやり方も必要になっているということだと思いますが、日常的な読書の文化をまちに定着させる、それが学校で実施しているいろいろな仕掛けが日常の中にもっと入っていくということかもしれません。文化祭のときだけ、学校行事のときだけ、ということをやっているとなかなか広がらないのかもしれません。

（委員）重村委員

学校では「読書の日」など設定されていて、おそらく学校ではたくさん読んでいるのだと思いますが、家に帰るとテレビやゲームなど、本に勝る魅力がたくさん潜んでいて、それらにどうしても本が負けている気がしています。学生たちの多くも本を手に取ることが少なくなりましたが、よく聞くと、彼らも携帯小説は読んでいるようです。学生たちの世界はスマートフォンがとても身近なものになっていて、電子書籍については比較的見る機会はあるように思います。ネットからもたらされる刺激的な情報が避けられない中、紙としての本が持つ魅力を伝えていくためにはどんな方策があるか、その仕掛けをどう作っていけるか、みなさんと一緒に考えていけたらと思っています。

（委員）山野委員

「ハートつながるブックスタート」というのがあります。宇部市で生まれた赤ちゃんの家庭に、本をプレゼントするものですが、それをうまく利用できるといいと思います。赤ちゃんへの読み聞かせのすすめということで、図書館も宣伝してきましたが、今のやり方では多分このまま終わると思います。柳井図書館では、読書通帳というものを取り入れています。この読書通帳をブックスタートのときにつけておくと、今まで図書館を利用したことのないお母さんも利用のきっかけになるのではないかと思います。費用もそれほどかからず、手作りでもできると思います。最初の絵本をその通帳に記入して、図書館に行ったら続きに記入できるようになると良いと思います。

（委員）久保田市長

「ハートつながるブックスタート」絵本プレゼント、今袋も持ってきていただいていますが、市民のみなさんに作っていただいた布袋で、宇部市独自の取組です。まだこの読書通帳は、実施していませんか。

（事務局）藤永図書館長

図書館ではまだ読書通帳は実施しておりません。

（委員）久保田市長

検討可能だと思います。御提案ありがとうございます。

（委員）田村委員

駐車場がないという点で、隣の宇部総合庁舎の駐車場が使えるとしても、大きく迂回しなければならないので、間の壁を取り払うか通路を作るなどして行き来できるようにできれば良いと思います。また、県の総合庁舎の食堂を土日も利用できれば、今はお弁当を持ってきて入口ロビーで食べている中高生などが行きやすいのではないかと思います。それから、今、多くのイベントを開催しているので、独自にフェイスブックなどを活用して積極的に発信していくべきだと思っています。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。確かに、県の総合庁舎との間の壁については県に相談してみます。食堂は誰が経営するかというところがありますので、コストなどいろいろ課題が出るかもしれませんが、良い御提案だと思います。このような時代、既存のものを存分に活用することを考えないといけないと思いますので、先ほどの、使用していないところの活用、取り払えばもっと広くできるという御提案、手作りでできるという仕掛け等、充分整理して検討したいと思います。子どもたちが読書に親しむためには、まち全体が読書の香りのするまちづくりが大事だというみなさんの御意見をいただきました。これを活かしていきたいと思います。読書のまちづくりについては引き続いてやっていきますので、また御意見をいただければと思います。

―　ＳＮＳを活用した相談体制の充実　―

（委員）久保田市長

まず、事務局から説明をお願いします。

（事務局）古富課長

いじめの早期発見の取組ですが、現在様々な方法で拾い上げています。まず、教職員による観察や見守り、日記などで毎日の子どもの様子を記録しています。それから、週１回のいじめアンケート調査、年２回の持ち帰り方式のいじめアンケートは、県内で唯一の取組で、有効な手段であると考えています。その他、相談電話、メールについては、各小中学校はもちろんですが、こども・若者応援課と連携して、子ども相談ダイヤルや教育支援課においても相談等を受け付けています。そのような中、平成３０年１０月のいじめアンケートから、小学校で８９２人、中学校で９９人、合計で９９１人がいじめを受けているとの結果が出ています。その中で、誰にも相談しなかった、できなかった児童生徒が全体の１６．６％の１６５人いることがわかっています。相談しなかった主な理由は、「いじめはそのうち終わるだろう」「もっとひどくなると思った」「相談しても解決しないと思った」という意見が上がっています。ここで、いじめの４層構造について説明します。４つの構造になっていまして、集団でのいじめの中には、いじめられている者（被害者）、その次、いじめている者（加害者）、次が周りではやし立てる者（観衆）、その周りが見て見ぬふりをする者（傍観者）に分けられます。このいじめの構造として、いじめられている者（被害者）から見たら周りではやし立てている観衆、見て見ぬふりをする傍観者も、いじめている者（加害者）に見えてくるものだと言われています。それから、ほかの者がいじめられているのを通報することで、自分もいじめの対象になるのではないか、という不安を持つ子どももいます。この４層構造を念頭に置いて、教育委員会・小中学校はいじめに対応をしているところです。先ほども出ました９９１件のいじめの認知の中で、１６５人の子どもは相談していないことが分かっていますし、今日、ＳＮＳなしでは生活ができないような状況になっています。ほかにも「閉ざされたネット空間でのいじめがあるのではないか」「これで全部のいじめを把握できているのだろうか」「いじめ対策というのが相談事業だけでいいのか」という課題が生じています。そこで、その課題を解決する事業として「ＳＮＳを活用した相談事業」の導入を検討しています。導入にあたり、いじめを受けている本人が匿名で相談できる、いじめを見た児童生徒も匿名で通報できる、児童生徒全員へ相談事業以外のいじめ対策ができるものがないか調査したところ、「ＳＴＯＰｉｔ」というアプリで対応が可能ではないかと考え、これを試験的に導入することを検討しています。実施にあたっては、対象を全員にするか一部の者にするのかということもありますが、全国的にも中１ギャップと言われるように、小学生から中学１年生に進級したときには、学習や生活環境、人間関係など新しい環境になじめないことが多いことから不登校になったり、いじめが増えたりすると言われています。このようなことから、宇部市では中学１年生が約１，３００人おりますので、その１，３００人を対象にしたいと考えています。「ＳＴＯＰｉｔ」の利点として挙げられているのが、いじめの予防から解決までトータルでサポートできるということです。児童生徒全員へいじめ対策の授業を実施して、いじめの発生を予防すること、スマホを持っていない児童生徒に対しても、ＳＯＳの出し方教育を実施するということがあります。スマートフォンを用いて、生徒が報告や相談をすることでいじめの早期発見、早期対応、いじめの防止・抑止につながります。報告や相談については、相談者の学校・学年は判明するシステムになっていますので、学校

側と連携して早期の問題解決につなげていくことが可能です。具体的に言いますと、児童生徒全員へのいじめ対策として、いじめ対策の授業を行い、スマホを持っていない生徒に、ＳＯＳの出し方（直接相談・電話相談）を教育する授業を展開します。それから、脱・いじめ傍観者教育として、「私たちの選択肢」というＤＶＤによる授業を実施して、先ほどのいじめの４層構造の傍観者の気持ちを変えて、いじめ自体を減らしていく取組を進めていきます。このアプリは、スマホ等にインストールした後アクセスコードを入力して、簡単に相談内容を入力できるシステムになっています。匿名で報告・相談ができます。通報を受けた後、児童生徒と教育委員会が匿名でＬＩＮＥと同じような形態でやり取りが可能ですし、報告・相談時には、その証拠となる画像やメールの画面、動画の添付もできます。次に、ＳＯＳ機能についてですが、関係機関の連絡先情報等を登録することで、色々な機関に相談できる仕組みになっています。千葉県柏市では、電話やメールの約９倍の相談実績との報告があります。今後の展開としては、来年度の中学１年生を対象に試験的に導入し、その成果を検証して２０２０年度以降本格導入につなげていきたいと考えています。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。早速ですが、ただ今の説明について、野口委員から思いをお願いします。

（委員）野口教育長

いじめは本当に見つけにくい構造ですから、教育相談やアンケートなどいろいろな方法がある中で、今子どもたちにとって一番身近なＳＮＳを使っていじめ対策ができるのではないか、と導入を検討しているところです。全国の自治体でも「ＳＴＯＰｉｔ」と「ＬＩＮＥ」によるいじめ相談がありますが、この「ＳＴＯＰｉｔ」は、いじめ対策等の授業も含めて予防から解決までトータルでサポート可能なシステムとなっており、教育的効果も見込めること、またセキュリティもしっかりしているということで、まずは試験的に導入できないかと検討しています。皆さんの御意見をいただければと思います。

（委員）久保田市長

いかがでしょうか。

（委員）田村委員

いじめを通報する、自分から打ち明けることへのハードルが非常に低くなる、素晴らしいツールになると思います。その中で大事だと思うのが、脱いじめ傍観者教育やＳＯＳの出し方教育です。これはＤＶＤをただ見るだけではなく授業として行うと思いますが、その授業を行う先生の力量も非常に大事だと思います。力量のない先生がやると、意味がないものになりかねないので、そこをしっかりしていただければ、通報等が増えていくのではと思っています。先生方のスキルアップをしていただきながら、頑張っていただきたいと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。これはツールですから、これで全て解決までつながるわけではありません。様々な対策の一つのツールが新たに出てきたということで、基本的なところは、そこに向き合う先生の力だという、大変本質的な御指摘をいただきました。ほかにはいかがでしょうか。

（委員）重村委員

中学校１年生から試験的に行うということですが、２０２０年度以降本格導入の対象範囲はどこまで広げていくことを構想されているか教えてください。

（委員）野口教育長

今の段階では、正式には決定していませんが、一番いじめの心配が高い中学校１年生から実施して、中学校２年、３年と広げていった例が多いので、その後実効性があると確認できれば小学校高学年まで広げる可能性もあります。スマホの所持率が、小学生は５０％程度、中学校３年で９０％程度ですが、そこは成果を見て検討したいと思います。

（委員）重村委員

いじめを受けている子どもたちは、自分から動けなくなっている子が多い気がします。一番身近な親がいじめに気づいてどこかに相談したい時に、これがどこまで活用できるかと思います。親がこのアプリを活用して子どもの様子を相談することも可能という理解でいいでしょうか。そうであれば、親としては心強いシステムだと思います。お子さんを亡くされた保護者の方は、何かできることがあったのではないかと自分を責めてしまうのだそうです。学校の先生には言えないが、第三者になら言えるということもあると思いますので、このようなツールの存在を保護者にも知らせていただけると良いと思います。

（委員）川﨑委員

宇部市で年２回実施されているいじめアンケートについて、最近では、子どもたちが少しでもいやなことがあったら書いても良いという雰囲気になっているのは事実だと思います。保護者からも、子どもから聞いたことを書きやすくなったという意見を聞いていますので、いじめアンケートもとても良いことだと思いますが、それでも、いじめられている子どもやいじめを見たが、その場の雰囲気やその後の友達との関係を考えて、誰にも相談できずにいる子どもも多いのではないかと思いますので、そんな時には、このアプリはとても有効なツールだと思います。また、傍観者の中にもいじめられている子を助けてあげたいと思う子どもがいて、そういう子どもたちにとって勇気ある一歩の一助となるのではないかと思います。いずれにしても最終的にはその後の先生の対応がとても大事だと思いますので、先生の対応に期待しています。

（委員）山野委員

去年と今年の成人式に行ったとき、中学校の時に学校に行けなかった子が立派に成人していたので、ありがたいと思いましたが、この子たちが中１の時にこのアプリがあったらもっと楽に中学校に行けていたかもしれないと思うと、うまくこれが活用できれば良いと思いました。スマートフォンを所持していない児童生徒への配慮ということで、直接もしくは電話相談などＳＯＳを出す方法を１年生全員に指導するというのは良いことだと思いますが、この指導がいつ行われるかということも気になります。入学してすぐ不登校になってしまった子どもや、その授業を実施した日に欠席した子どもなど、その授業が受けられなかった子どもに対して、必ず指導ができるようにしていただければと思います。また、夜も相談可能であると良いと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。教育長、いかがですか。

（委員）野口教育長

今、委員さんのお話を聞いて、この「ＳＴＯＰｉｔ」を活用したＳＮＳについては、多分効果があがるのではないか、という思いは持っていますが、当然、これは市長も言われたとおりツールですので、教員の感性や授業力など、どれだけ子どもたちや保護者の思いに寄り添って対応できるかが一番大切だということは言うまでもありません。ツールに頼るのではなく、利用しながら、学校全体でいじめに苦しむ子を絶対に出さない、一人でも減らしていきたいと思います。また、これは先の話になると思いますが、もしこういう匿名で相談できるツールが子どもたちの間に広まっていけば、例えば、いじめだけではく、虐待やＬＧＢＴ、進路や友人関係、ネット上のトラブルなどで悩んでいる子どもたちもこれで相談ができるようになり、そしてこれを使って解決できたら、表現は悪いですが、いじめている子に対する抑止力にもなる、将来的にはそのようになっていけば良いと思っています。

（委員）久保田市長

本当にその通りだと思います。要は、一番は人と人が対応することということですが、先ほどのアンケートでもあったように、なかなか直接相談できない、電話もできない、メールもできない、結果相談していませんという現実にどう向き合うかということで、新たな手法・手段を使おうということで出てきたツールです。もちろんこれで全てではありませんが、それでも使い方によってはいろいろな可能性を持っているのではないかということで、こうやって知恵を出しながら、工夫しながら、いじめに苦しむ子どもをどんどん減らしていきたいと、野口委員からまとめていただきました。その上で教員の資質の向上も併せておっしゃっていただきました。ありがとうございます。それでは、みなさんからほかに何か、議事１も振り返って、どちらでも結構ですが本日の議題で、何かありますでしょうか。

（委員）田村委員

蛇足かもしれませんが、この度の、ＤＶで亡くなった小学４年生の児童の話で、教育委員会からリークしてしまったとうこともありますので、このツールも使い方を誤ると同じ事になりかねないし、子どもたちも報道を見ていると思います。相談しても教育委員会が漏らしてしまうと思われていると、これですら通報してくれないことになりかねないので、そこはより力を入れて徹底しなければならない状況にあると思いますので御留意いただけたらと思います。

（委員）久保田市長

ありがとうございます。この度の、野田市の、本当に心が痛む、痛ましい事件を通して、私たちが考えなければいけないのは、家庭、保護者が絶対に子どもを守るということだけを前提にできないということです。ファミリーバイオレンスという言葉があるように、家庭の中も実は暴力が非常に強く広がっているということになれば、家庭に持ち帰らせるということ、家族と話し合うということが、とても悲惨な結果をもたらすこともありえます。前教育長が始められたアンケートは、宇部市教育委員会独自のやり方ですが、この度の事案を見て、家庭が安全な場所、保護者が絶対的に子どもを守っていくということだけを前提にして良いのか、とゆらぎを感じたところだと思いますので、教育長として、コメントをお願いします。

（委員）野口教育長

持ち帰りアンケートの制度は、家庭が信頼できる、１００％子どもを守ってくれるということが前提の上にできましたが、今はそういう時代ではありません。当然レアケースだと思いますが、学校、教育委員会は、もしかしたら家庭で虐待があるのではないかと思われる子どもをどう守っていくのか、市の子ども若者応援部、児童相談所や警察等と情報共有しながら連携していかないといけない、という思いを持ちました。本当に思いもよらないことが起こる時代になってきていると思いますので、子どもを守る、子どもの安心安全を絶対に担保するという思いで、これも一つの方法として取り組んでいこうと思っています。

（委員）久保田市長

全国的に見ても児童虐待やＤＶが増えている中で、こうした問題に対して総合的に見ていく、それから空振りでもいいから早めに予兆を通報する、これも、災害時に空振りでもいいから早く避難勧告をというのと一緒で、人の命を救うために空振りになるかもしれないけれど、早めに地域を含めて情報共有して動こうということを、私たちは今回の件で学ばされたと思います。またそういう点では、教育委員の皆様方には引き続いて、地域での御活動もよろしくお願いしたいと思います。それでは、よろしいでしょうか。読書のまちづくりとＳＮＳを活用した相談体制の充実について、大変有意義な御意見を頂戴することができました。どうもありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

以上で、平成３０年度宇部市総合教育会議（第２回）を終わります。